

追求-後悔尺度による意思決定スタイルの測定

— 尺度の信頼性と自己肯定意識尺度との関係に関する検討 —

都 築 誉 史

1. 問題と目的

von Neumann & Morgenstern (1944) は、期待効用理論 (expected utility theory) によって、合理的な意思決定の条件を公理化して示した。期待効用理論によれば、個々の選択肢の期待効用を計算し、最大の期待効用をとる選択肢を選ぶ意思決定が合理的である。このように、客観的確率が外的に与えられる場合を“リスク下の意思決定 (decision making under risk)”と呼ぶ。確率ではなく、ある事象に関する特定個人の主観確率を用いて期待効用理論を拡張したものが、主観的期待効用理論 (subjective expected utility theory: Savage, 1954) である。このように、客観的確率ではなく主観的確率のみに頼らざるをえない場合を、“不確実性下での意思決定 (decision making under uncertainty)”と呼んで前者と区別する。

人間の判断や意思決定が、合理的で論理的に一貫した期待効用理論から逸脱する事例は、心理学や経済学において数多く見出されている (Kahneman & Tversky, 2000; Tversky, 2004)。上述の2理論は、いわゆる規範理論であり、リスク下における実際の選択に関する近年の代表的な記述理論としては、Tversky & Kahneman (1992) による累積プロスペクト理論 (cumulative prospect theory) をあげることができる。

Simon (1957) は、現実の人間の認知能力には限界があり、時間や環境からの制約があるため、完全な合理性ではなく、限定合理性 (bounded

rationality) しか持ち得ないと述べている。したがって、人間の意思決定は、期待効用理論が仮定するように、全ての選択肢に関する情報を統合し、期待効用を最大化する決定を行う最適化 (optimization) ではなく、不明確で限定された状況の下で、受け入れられるある程度の達成で満足するような、満足化 (satisficing) の原理に従うと主張した。

人間の知的能力に個人差が存在することは間違いない。知能や学習能力に関しては膨大な研究があり、情報の処理や判断の様式 (cognitive style: 認知スタイル) に熟慮型 (reflectivity) と衝動型 (impulsivity) があるという研究もよく知られている (Kagan, Rosman, Day, & Phillips, 1964)。意思決定のスタイルに関する近年の代表的な研究例として、Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubomirsky, White, & Lehman (2002) による“追求-満足 (maximizing-satisficing)”尺度, Thompson, Naccarato, Parker, & Moskowitz (2001) による“非妥当性への恐れ (personal fear of invalidity)”尺度, Buhr & Dugas (2002) による“不確実性への不耐性 (intolerance of uncertainty)”尺度などをあげることができる。

Schwartz et al. (2002) は多肢選択の意思決定を行う状況で、最上を求める“追求者 (maximizer)”と、まずまずの基準で手を打つ“満足者 (satisficer)”という2つの意思決定スタイルを区別した。Schwartz et al. (2002) は、彼らの開発した追求尺度が、後悔尺度や抑うつ尺度

(BDI: Beck depression inventory) と有意な正の相関を示し、主観的幸福感尺度 (subjective happiness scale) や楽観性尺度 (life orientation test) と有意な負の相関関係を示したと報告している。Schwartz et al. (2002) による追求-後悔尺度に関しては、幾つかの研究が行われており (久富・磯部・大庭・松井・宇井・高橋・竹村, 2005; 檜村・松井・新井, 2006; von Helversen & Timothy, 2006), 磯部・久富・松井・大庭・宇井・高橋・竹村 (2005) は、日本版の追求-後悔尺度を提案している。

本研究は、第1に Schwartz et al. (2002) の追求-後悔尺度を和訳し、日本の大学生を対象として調査を行い、尺度の信頼性を検討することを目的とした。磯部ら (2005) も同様の調査を報告しているが、著者らが調査1を行った時点では、全く互いに情報のやりとりがなかった。これら2グループによる Schwartz 尺度の調査は、全く別個に行われたものであり、和訳された項目の表現も異なる。

第2に、青年期に重要な問題である自尊感情 (self esteem) に注目し、充実感、自己実現的態度、自己受容という3種類の下位尺度からなる自己肯定意識尺度 (平石, 1990, 1993) と追求-後悔尺度との関係を検討する。

2. 調査1

目的

和訳した Schwartz et al. (2002) の追求-後悔尺度を用いて、大学生を対象に調査を行い、因子分析と尺度構成を実施し、尺度の信頼性について検討することを目的とする。

方法

調査対象者 立教大学現代心理学部の1年生、計139名であった (男子37名, 女子95名, 無記入7名, 平均年齢19.20歳)。

調査時期および手続 2007年1月に、“認知心

理学”の授業中に、調査を実施した (集合回収調査, 有為抽出)。

質問紙の構成 Schwartz et al. (2002) による追求尺度13項目, 後悔尺度5項目 (合計18項目) を和訳し、日本の実情にそぐわない1項目 (ラジオのチャンネル選択) を追求尺度から除外した計17項目を用いた。各項目について、7件法 (全くそう思わない: 1-非常にそう思う: 7) で回答を求めた。

結果と考察

(1) 因子分析

追求-後悔尺度の計17項目に関して、因子分析を行った (一般化最小二乗法, プロマックス回転)。Table 1に、追求-後悔尺度に関する因子分析結果を示す。スクリーテストと解釈可能性から、3因子が最も妥当であると判断した (回転前の固有値は、順に、3.15, 2.13, 1.49)。3因子による説明率は、30.46%であった。以下、Table 1のパターン行列に基づいて、因子構造を解釈する。

第1因子に負荷の高い項目は、“選択するときはいつも、選ばなかった選択肢がその後どうなったかについて情報を集めようとする”, “選択するときはいつも、もし違った選択をしていたらどうなっていたか、知りたいと思う”, “どれを選んでうまくいったとしても、別な選択肢ならさらにうまくいったことがわかると、失敗したような気がする”などであり、“後悔”の因子であると解釈できる。第2因子は、“何をやるにしても、自分に最高の基準を求める”, “決して次善で妥協はしない”, “人間関係を洋服と同じように扱う。自分にぴったりの相手が見つかるまで、何度も試してみる”などの項目に負荷が高く、“最高基準”の因子であると考えられる。第3因子に負荷の高い項目は、“文章を書くのはとても難しいと思う。友人にちょっと手紙を書くだけでも、きちんと言葉にするのは大変だ。単純な用件でも、たいてい何度か下書きをする”, “買い物をするとき、本当に気に入った服を見つけるのは一苦労だ”, “今の

Table 1
Schwartz et al. (2002) による追求-後悔尺度の因子分析結果
(一般化最小二乗法, プロマックス回転)

項 目	F1	F2	F3	共通性
R. 選択するときはずいぶん、選ばなかった選択肢がその後どうなったかについて情報を集めようとする。	.79	.22	-.14	.70
R. 選択するときはずいぶん、もし違った選択をしていたらどうなっていたか、知りたいと思う。	.63	.06	-.17	.43
R. どれかを選んでうまくいったとしても、別な選択肢ならさらにうまくいっていたことがわかると、失敗したような気がする。	.60	-.05	.26	.42
R. 自分の人生はうまくいっているだろうかと考えるとき、見送った機会について、あれこれ思いめぐらすことがよくある。	.58	-.03	.20	.38
^{a)} R. いったん決めたら、振り向かない。	.50	-.39	-.11	.41
M. 何をするにしても、自分に最高の基準を求める。	.14	.69	-.08	.50
M. 決して次善で妥協はしない。	-.32	.55	.09	.41
M. 人間関係を洋服と同じように扱う。自分にぴったりの相手が見つかるまで、何度も試してみる。	.28	.41	.01	.25
M. 今の仕事にどれだけ満足していても、さらによい機会を求めて目を光らせているのは当たり前なことだ。	.16	.40	-.07	.19
M. 文章を書くのはとても難しいと思う。友人にちょっと手紙を書くだけでも、きちんと言葉にするのは大変だ。単純な用件でも、たいてい何度か下書きをする。	-.03	-.05	.62	.39
M. 買い物するとき、本当に気に入った服を見つけるのは一苦労だ。	-.06	.14	.47	.24
M. 今の生活と全く違う生活を送っているところを夢想することがよくある。	.10	-.18	.46	.25
M. 何かを選ぶときはいつも、他にどんなオプションが考えられるか、一つ残らず思い浮かべようとする。現状ではそこにはないものまでも考える。	.33	.24	.28	.24
M. 友人への贈り物を買うのは、難しいと思うことがよくある。	.16	.25	.06	.09
M. 何であれ、物事をランク付けしたリストがとても好きだ (映画, 歌手, スポーツ選手, 小説のベスト 10 など)。	.06	.16	.06	.03
M. DVD (ビデオ) を借りるのは本当に難しい。いつも最高の一本を選ぼうとして苦労する。	.09	.08	.31	.11
M. テレビを観ているとき、チャンネルを次々に切り替える。ある番組を観ようとしている最中でも、別のチャンネルをひとわりざっと眺めてみる。	-.05	.13	.20	.06
平方和	2.35	1.54	1.22	
寄与率 (%)	13.83	9.08	7.20	

注) 表中の R, M は Schwartz et al. (2002) における後悔尺度, 追求尺度を示す。また, ^{a)}は逆転項目である。

生活と全く違う生活を送っているところを夢想することがよくある”などであり，“達成努力”の因子であると解釈した。因子間相関（Pearsonの r ）は、第1-第2因子間で.02, 第1-第3因子間で.21, 第2-第3因子間で.24であった。

後悔尺度5項目に関しては、本調査の分析でもSchwartz et al.（2002）と同様に1因子構造が得られ、信頼性係数（ α 係数）は.74であった。Schwartz et al.（2002）の研究では追求尺度に関して3因子が抽出されたが、本調査の因子分析では、“最高基準”と“達成努力”と命名した2因子が抽出された（Table 1参照）。因子負荷量.4以上という基準を設定した場合、負荷の高い項目は、“最高基準”因子で4項目、“達成努力”因子で3項目であり、追求尺度12項目中5項目が2因子の両方に負荷が低かった。

Schwartz et al.（2002）の因子分析結果と比較してさらに詳しく述べると、(1) 本調査において“最高基準”因子に負荷の高い4項目は、2項目ずつ、Schwartz et al.（2002）の第4, 第2因子と対応し、(2) 本調査の“達成努力”因子に負荷の高い3項目は、Schwartz et al.（2002）の第3因子2項目、第2因子1項目と対応した。(3) 本調査で3因子全てに負荷の低かった5項目は、Schwartz et al.（2002）の第2因子2項目、第3因子2項目、第4因子1項目に対応した。

(2) 下位尺度と尺度間相関

Table 2に上記の因子分析結果に基づいて作成した、3種類の下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数を示す。先に述べたように、後悔尺度の α

係数は.74とある程度高かったが、最高基準尺度と達成努力尺度の α 係数はともに低かった（順に、.55, .40）。Table 2の下位尺度の値は、合計を項目数で除した値である。また、Table 3に示したように、3尺度間の相関係数は低く、Schwartz et al.（2002）で報告された追求尺度-後悔尺度間の有意な正の相関関係は示されなかった。

磯部ら（2005）は、本研究とは独立に、Schwartz et al.（2002）の追求-後悔尺度18項目を和訳して調査を行い、因子分析を適用した結果を報告している。磯部ら（2005）の分析では、“後悔”、“追求”、“優柔不断”、“チャンネル探索”と命名された4因子が抽出された。“チャンネル探索”因子に負荷の高かった項目は2項目であったが、ふつう因子分析では、3項目以上に対応する因子が望ましいとされている。また、本調査で除外した項目（ラジオのチャンネル選択）は、磯部ら（2005）の分析における第3因子に負荷が高かった。したがって、磯部ら（2005）による、“後悔”、“追求”、“優柔不断”の3因子は、本調査における、“後悔”、“最高基準”、“達成努力”の3因子とほぼ対応していると考えることができる。

磯部ら（2005）も指摘しているように、後悔尺度の信頼性は満足できる水準であるが、追求尺度の信頼性は充分とは言えない。Table 1に示したように、Schwartz et al.（2002）による追求-後悔尺度の項目は、表現が複雑で、すばやく理解することが困難なものが多いことも問題であると考えられる。

Table 2

追求-後悔尺度の下位尺度の平均値, SD, α 係数

下位尺度	平均	SD	項目数	α
後悔	4.40	1.10	5	.74
最高基準	3.77	0.90	4	.55
達成努力	4.56	1.06	3	.40

Table 3

追求-後悔尺度の下位尺度間の相関係数

	後悔	最高基準
後悔		
最高基準	.08	
達成努力	.16	.09

3. 調査2

目的

磯部ら(2005)が作成した、日本版追求-後悔尺度と、平石(1993)による自己肯定意識尺度(短縮版, 対自己領域)を用いて調査を行い、因子分析結果に基づいて、尺度構成を行う。そして、構成された下位尺度間の関係を検討し、さらに、重回帰分析によって、追求尺度得点に影響を及ぼす要因についても検討を行う。

方法

調査対象者 立教大学現代心理学部の1, 2年生, 計155名であった(男子48名, 女子107名, 平均年齢19.02歳)。

調査時期および手続き 2007年7月に、“心理学概説1”の授業中に、調査を実施した(集合回収調査, 有為抽出)。

質問紙の構成 磯部ら(2005)による日本版追求-後悔尺度の計16項目(各々8項目)と、平石(1993)による自己肯定意識尺度(短縮版, 対自己領域)を用いた。平石(1993)の先行研究によれば、自己肯定意識尺度は、(1) 自己受容(4項目)、(2) 自己実現的態度(7項目)、(3) 充実感(8項目)の3下位尺度から構成される。各項目について、7件法(全くそう思わない:1-非常にそう思う:7)で回答を求めた。

結果と考察

(1) 追求-後悔尺度に関する因子分析

磯部ら(2005)による日本版追求-後悔尺度の計16項目に関して、因子分析を行った(主因子法, プロマックス回転)。Table 4に、追求-後悔尺度に関する因子分析結果を示す。スクリーテストと解釈可能性から、3因子が最も妥当であると判断した(回転前の固有値は、順に、4.22, 2.53, 1.51)。3因子による説明率は、42.38%であった。以下、因子負荷量.4以上を基準として設定し、Table 4のパターン行列に基づいて、因子構造を

解釈する。

第1因子に負荷の高い項目は、“何かを購入した後に、違うものにしていればよかったという事がよくある”、“ある商品を購入した際、より良い商品があった可能性を考えて後悔する事がある”、“選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔する事が多い”などであり、“購入における後悔”の因子であると考えられる(以下、“後悔(購入)”因子と略記)。第2因子は、“過ぎてしまった事に対して、‘こうすれば良かった’などと考える事がよくある”、“人生において、‘あの時にこうしておけば良かった’と強く思うことが多い”、“くよくよ過去の事を悔やむ方だ”などの項目に負荷が高く、“人生における後悔”の因子であると考えられる(以下、“後悔(人生)”因子と略記)。第3因子に負荷の高い項目は、“どんな趣味でも、究めてみたくなり、没頭するタイプである”、“商品を選ぶ時は、つねに最良のものを選ぶようにしている”、“可能性がある限り、物事を追求する事に苦労は惜しまない”などであり、“追求”の因子であると考えられる。因子間相関は、第1-第2因子間で.47、第1-第3因子間で.03、第2-第3因子間で.16であった。

(2) 自己肯定意識尺度に関する因子分析

平石(1993)による自己肯定意識尺度(対自己領域)の19項目に関して、因子分析を行った(主因子法, プロマックス回転)。Table 5に、自己肯定意識尺度に関する因子分析結果を示す。スクリーテストと解釈可能性から、3因子が最も妥当であると判断した(回転前の固有値は、順に、7.54, 1.77, 1.59)。3因子による説明率は、49.88%であった。以下、因子負荷量.39以上を基準として設定し、Table 5のパターン行列に基づいて、因子構造を解釈する。

第1因子に負荷の高い項目は、“生活がすごく楽しいと感じる”、“わだかまりがなく、スカッとしている”、“精神的に楽な気分である”などであり、平石(1993)の分析における“充実感”の因

Table 4
磯部ら (2005) による日本版追求-後悔尺度の因子分析結果
(主因子法, プロマックス回転)

項 目	F1	F2	F3	共通性
R. 何かを購入した後に、違うものにしていればよかったという事がよくある	.81	-.02	.02	.66
R. ある商品を購入した際、より良い商品があった可能性を考えて後悔する事がある	.81	-.07	.08	.67
R. 選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔する事が多い	.76	.04	-.09	.59
R. 購入した商品が良かったとしても、“もっと良いものもあっただろうに”と思ってしまうことが多い	.71	.02	-.08	.52
R. 過ぎてしまった事に対して、“こうすれば良かった”などと考える事がよくある	.07	.92	.03	.86
R. 人生において、“あの時こうしておけば良かった”と強く思うことが多い	-.03	.73	.02	.53
R. くよくよ過去の事を悔やむ方だ	-.05	.72	-.07	.53
M. どんな趣味でも、究めてみたくなり、没頭するタイプである	-.11	-.01	.68	.47
M. 商品を選ぶ時は、つねに最良のものを選ぶようにしている	.10	.09	.59	.37
M. 可能性がある限り、物事を追求する事に苦労は惜しまない	-.10	-.14	.54	.32
M. お気に入りのもの・タレント・歌手などは、とことん追及する	-.04	.00	.53	.28
M. 1つのものを買うにも、他店と比べてみる事が多い	.27	.11	.42	.26
M. 何かの決断をする時は、ありとあらゆる選択肢を考えてみる	.03	-.02	.41	.17
R. 自分は優柔不断だと思う	.29	.32	-.05	.19
M. 買い物の時間や、商品を選ぶ時間が他人より長いと思う	.24	.18	.21	.13
M. 新しい商品、流行の健康法など、つねに情報収集は欠かさない	.01	.00	.29	.09
平方和	2.66	2.08	1.88	
寄与率 (%)	15.67	12.24	11.08	

注) 表中の R, M は磯部ら (2005) における後悔尺度, 追求尺度を示す。

子に対応している。第2因子は、“自分の夢をかなえようと意欲に燃えている”, “自分には目標というものがない (逆転項目)”, “情熱をもって何かに取り組んでいる” などであり, 平石 (1993) の分析における “自己実現的態度” の因子に対応している (以下, “自己実現” 因子と略記)。第3因子に負荷の高い項目は, “自分の個性を素直に受け入れている”, “自分なりの個性を大切にしている”, “自分の良いところも悪いところもありの

ままに認めることができる” などであり, 平石 (1993) の分析における “自己受容” の因子に対応している。因子間相関は, 第1-第2因子間で .53, 第1-第3因子間で .31, 第2-第3因子間で .30 であった。

(3) 下位尺度と尺度間相関

Table 6 に上記の因子分析結果に基づいて作成した, 6 種類の下位尺度の平均値, 標準偏差, α

Table 5
自己肯定意識尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項 目	F1	F2	F3	共通性
生活がすごく楽しいと感じる	.74	.20	-.13	.60
わだかまりがなく、スカッとしている	.69	-.06	.11	.49
精神的に楽な気分である	.65	-.17	.25	.52
自分のはびのびと生きていると感じる	.60	-.17	.34	.50
前向きの姿勢で物事に取り組んでいる	.60	.26	.07	.43
a) ころから楽しいと思える日がない	.48	.25	-.28	.37
a) 満足感がもてない	.44	.21	.01	.23
自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	-.12	.85	.17	.77
a) 自分には目標というものがない	-.11	.67	.17	.50
情熱をもって何かに取り組んでいる	.13	.59	.07	.38
張り合いがあり、やる気が出ている	.39	.59	-.06	.50
a) 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない	.05	.58	.06	.34
自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている	.13	.46	.11	.24
自分の個性を素直に受け入れている	.04	.11	.71	.51
自分なりの個性を大切にしている	.04	.27	.64	.49
自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる	.30	-.02	.52	.36
私には私なりの人生があってもいいと思う	-.10	.12	.39	.18
充実感を感じる	.56	.45	-.13	.53
自分の好きなことがやれていると思える	.36	.28	.07	.21
平方和	3.34	3.08	1.72	
寄与率 (%)	17.56	16.23	9.07	

注) a)は逆転項目を示す。

係数を示す。磯部ら（2005）のデータを本調査結果と比較可能な形に変換すると、平均値は、後悔尺度、追求尺度の順に、4.64、4.80であり、本調査結果とほぼ等しい。

平石（1993）のデータを本調査結果と比較可能な形に変換すると、大学生の平均値は、充実感尺度、自己実現尺度、自己受容尺度の順に、3.17、3.22、4.06であり、自己肯定意識尺度の3種類の下位尺度すべてにおいて、本調査結果の方がポジティブな方向に高い値を示している。

Table 7は、6種類の下位尺度間の相関係数を示したものである。追求尺度－後悔（購入）尺度

Table 6
追-後悔尺度と自己肯定意識尺度の下位尺度の平均値, SD, α係数

下位尺度	平均	SD	項目数	α
後悔（購入）	4.01	1.32	4	.86
後悔（人生）	4.87	1.37	3	.84
追求	4.71	0.93	6	.69
充実感	4.45	1.04	7	.84
自己実現	4.11	1.21	6	.86
自己受容	5.17	0.94	4	.73

Table 7
 追求-後悔尺度と自己肯定意識尺度の下位尺度間相関係数

	後悔（購入）	後悔（人生）	追求	充実感	自己実現
後悔（購入）					
後悔（人生）	.38**				
追求	.06	.15			
充実感	-.21**	-.41**	.26**		
自己実現	-.21*	-.13	.42**	.60**	
自己受容	-.22**	.25**	.38**	.46**	.48**

* $p < .05$, ** $p < .01$

間、追求尺度-後悔（人生）尺度間、自己実現尺度-後悔（人生）尺度間の相関係数は有意ではなかったが、それ以外の12個の相関係数は全て有意であった。絶対値が.4以上の有意な相関係数は、後悔（人生）尺度-充実感尺度間（-.405）、追求尺度-自己実現尺度間（.421）、自己実現尺度-充実感尺度間（.604）、自己受容尺度-充実感尺度間（.460）、自己受容尺度-自己実現尺度間（.477）で得られた。

序論で述べたように、Schwartz et al. (2002) は、追求尺度が後悔尺度や抑うつ尺度と有意な正の相関関係を示し、主観的幸福感尺度や楽観性尺度と有意な負の相関関係を示したと報告している。日本版を用いた本研究・調査2の結果、追求尺度と後悔尺度の関係はほぼ無相関であった。さらに、追求尺度は充実感、自己実現、自己受容の3尺度（自己肯定意識尺度の下位尺度）の各々と有意な正の相関関係をもつことが示された（Table 7参照）。磯部ら（2005）は、追求尺度と後悔尺度の相関係数が、.20であったと報告しており、Schwartz et al. (2002) による先行研究ほど高い値ではない。

(4) 重回帰分析

尺度間相関の結果をふまえて、追求尺度得点を従属変数とし、後悔（人生）尺度得点、自己実現尺度得点、自己受容尺度得点の3つを独立変数と

した重回帰分析のモデルを設定した。このモデルでは、上記の3つの独立変数をふくむ5尺度の得点間に、尺度間相関係数をふまえた相関関係を仮定した。分析の結果、標準偏回帰係数は、後悔（人生）尺度（ $\beta = .28$, $p < .01$ ）、自己実現尺度（ $\beta = .34$, $p < .01$ ）、自己受容尺度（ $\beta = .32$, $p < .01$ ）のすべてにおいて有意であり、3つの独立変数のうち、相対的に、自己実現尺度が追求尺度に最も大きな影響を及ぼしていることが見出された。Amosによる重回帰分析の結果を、Figure 1に示す。モデルの適合度指標は良好であった（ $\chi^2 = 1.51$, $df = 2$, $p = .47$; GFI = 1.00, AGFI = .96, CFI = 1.00, RMSEA = .00, AIC = 39.51）。

4. 総合考察と今後の課題

本研究では、調査1において、Schwartz et al. (2002) による追求-後悔尺度の翻訳版を用い、尺度の信頼性を検討した。その結果、後悔尺度の信頼性は確認できたが、追求尺度の信頼性は充分ではないことが判明した。調査2では、磯部ら（2005）による日本版追求-後悔尺度と平石（1993）による自己肯定意識尺度の関係を重回帰分析によって検討したところ、後悔（人生）尺度得点、自己実現尺度得点、自己受容尺度得点の3つが追求尺度得点に正の影響を及ぼすことが見出された。

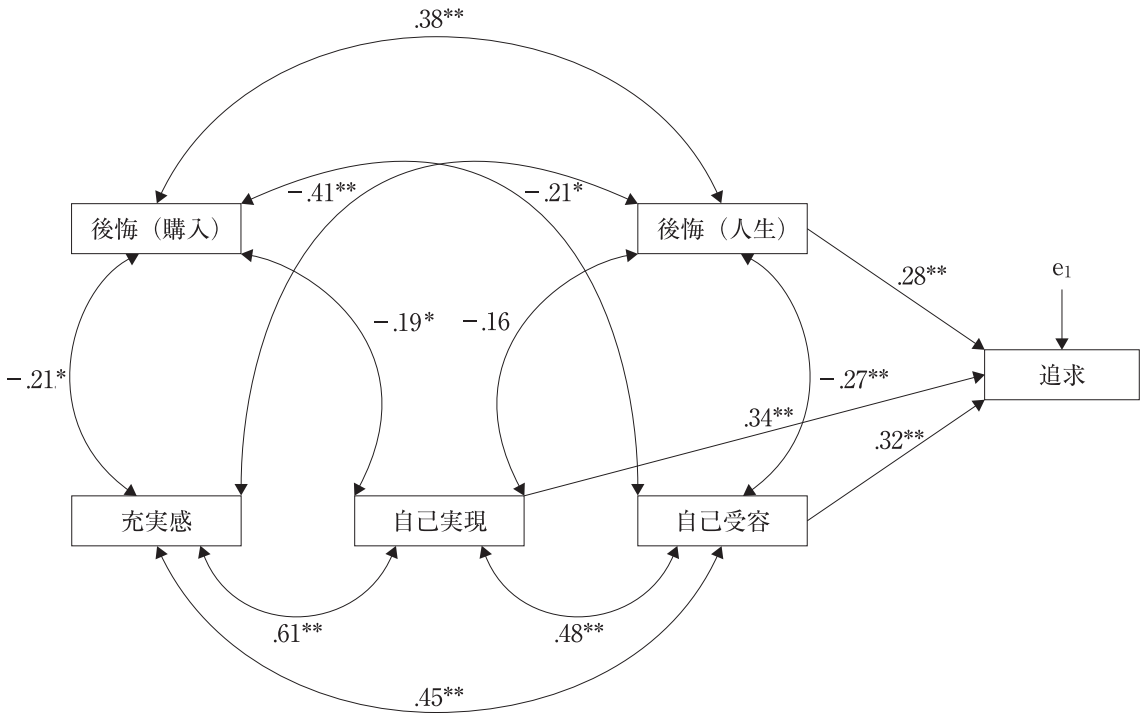


Figure 1. 追求-後悔尺度と自己肯定意識尺度の下位尺度間関係に関する重回帰分析結果

一方、多属性意思決定において、合理的決定基準から逸脱した非合理的な文脈効果が、近年、いくつか見いだされている (Tsuzuki & Guo, 2004; 都築・松井, 2006a)。代表的な文脈効果として、魅力効果 (attraction effect: Huber, Payne, & Puto, 1982)、類似性効果 (similarity effect: Tversky, 1972)、妥協効果 (compromise effect: Simonson, 1989) の3つをあげることができる。従来の研究では、2つの属性において大きく異なるターゲット (例: 走行性能は高いが、燃費は悪い自動車) と、コンペティター (例: 走行性能は低い、燃費は良い自動車) といった2選択肢 (両者の選択比率はほぼ等しく、ともに約50%) から1つを選ぶ条件と、両者を参照して属性を操作した第3選択肢を加えた3つから選択する場合とが比較された。

魅力効果とは、第3選択肢の効用が全ての属性

においてターゲットよりもやや劣るならば、ターゲットの選択比率が増加することをさす。類似性効果とは、第3選択肢がターゲットよりも1属性でやや劣り、別の属性でやや優れるというトレードオフがある場合、ターゲットの選択比率が低下することをさす。妥協効果とは、第3選択肢が2属性において、ターゲットとコンペティターの中間に位置するならば、第3選択肢の選択比率が最も高くなることをさす。

都築ら (Tsuzuki & Matsui, 2006; 都築・松井, 2006b; 都築・松井, 2006c; 都築・松井・木村, 2006) は、予備調査データに基づいた多数の刺激材料を用い、上記3種類の文脈効果を、同一の実験手続きと複数の測度によって詳細に検討している。さらに、都築ら (都築・太田・白井・松井・本間, 2007; 都築・白井・太田・本間・松井, 2007) は、多属性意思決定における実験参加

者の眼球運動を測定することによって、意思決定プロセスの検討を行っている。本研究で検討した追求者-満足者といった意思決定スタイルの違いが、多属性意思決定における上記3種類の文脈効果にどのような影響を及ぼすかは、興味深い問題である。

Hofstede (2001) は、50カ国と3地域のIBM社員を対象とした労働意識調査に基づいて、国民文化を4次元で分類した。4次元とは、(1)個人主義-集団主義 (individualism, collectivism), (2)不確実性の回避 (uncertainty avoidance), (3)権力格差 (power distance), (4)男性らしさ-女性らしさ (masculinity, femininity) である。Hofstede (2001) によれば、日本は、個人主義と権力格差は中程度で、不確実性の回避が高く、男性らしさは世界一高い。これに対して、アメリカ合衆国は、個人主義が世界一高く、不確実性の回避、権力格差、男性らしさの3次元は中程度である。さらに、近年、東洋人と西洋人とで、思考や意思決定の仕方がかなり異なることが、幾つかの実証的な研究によって明らかにされてきている (Choi, Choi, & Norenzayan, 2004; Nisbet, 2003)。

追求尺度に関して、Schwartz et al. (2002) の結果と本研究の調査1, 2を比較すると、上述のようにかなりの相違点が見出された。こうした傾向は、磯部ら (2005) でも報告されている。したがって、意思決定スタイルについて研究を進める際に、何らかの国民文化の違いを前提条件として考慮することも必要になる可能性がある。

注) 本研究の調査2は、著者の指導のもとに、2007年度に本学大学院現代心理学研究科に提出された、本学大学院現代心理学研究科心理学専攻博士課程前期課程2年の太田亨さんの修士論文研究 (題目: 個人差要因と気分が反実仮想におよぼす効果に関する実験的検討) の一部として行われたものである。ただし、本論文で示した調査データの分析と結果の解釈は著者によるものであり、太田亨

さんの修士論文における記述とは全く別個である。本研究・調査2を実施していただいた太田亨さんに、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Buhr, K., & Dugas, M. J. (2002). The intolerance of uncertainty scale: Psychometric properties of the English version. *Behaviour Research and Therapy*, **40**, 931-945.
- Choi, I., Choi, J. A., & Norenzayan, A. (2004). Culture and decision. In D. J. Koehler & N. Harvey (Eds.), *Blackwell handbook of judgment and decision making*. Malden, MA: Blackwell. pp. 504-524.
- 平石賢二 (1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) — 重要な他者からの評価との関連 — 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **40**, 99-125.
- 久富哲兵・磯部綾美・大庭剛司・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・竹村和久 (2005). 安心と不安の社会心理 (IV) — 意思決定スタイルと信頼との関係 — 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 230-231.
- Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences, comparing values, behaviors, institutions, and organizations across nations*, 2nd ed. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Huber, J., Payne, J. W., & Puto, C. (1982). Adding asymmetrically dominated alternatives: Violations of regularity and the similarity hypothesis. *Journal of Consumer Research*, **9**, 90-98.
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・大庭剛司・宇井美代子・高橋尚也・竹村和久 (2005). 意思決定における後悔・追求者尺度の開発 — Schwartz 尺度の日本語版 — 第7回日本感性工学会大会予稿集, 166.
- Kagan, J., Rosman, B. P., Day, D. A. J., & Phillips, W. (1964). Information process-

- ing in the child : Significance of analytic and reflective attitudes. *Psychological Monographs*, **78**, 1-37.
- Kahneman, D., & Tversky, A. (2000). *Choices, values and frames*. New York : Cambridge University Press and the Russell Sage Foundation.
- 檜村崇・松井豊・新井洋輔 (2006). 購買行動時のマキシマイザー理論の検討 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 54-55.
- Nisbett, R. (2003). *The geography of thought : How Asians and Westerners think differently... and why*. New York : Simon & Schuster.
- (村本由紀子 (訳) (2004). 木を見る西洋人 森を見る東洋人——思考の違いはいかにして生まれるか—— ダイヤモンド社)
- Savage, L.J. (1954). *The foundations of statistics*. New York : Wiley.
- Schwartz, B. (2004). *The paradox of choice : Why more is less*. New York : Harper-Collins.
- (瑞穂のりこ (訳) (2004). なぜ選ぶたびに後悔するのか——「選択の自由」の落とし穴—— ランダムハウス講談社)
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D.R. (2002). Maximizing versus satisficing : Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1178-1197.
- Simon, H. A. (1957). *Models of man : Social and rational*. New York : Wiley.
- Simonson, I. (1989). Choice based on reasons : The case of attraction and compromise effects. *Journal of Consumer Research*, **16**, 158-174.
- Thompson, M.M., Naccarato, M.E., Parker, K.C.H., & Moskowitz, G.B. (2001). The personal need for structure and personal fear of invalidity measures : Historical perspectives, current application and future directions. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology : On the tenure and future of social cognition*. Hillsdale, NJ : Erlbaum. pp.19-39.
- Tsuzuki, T., & Guo, F.Y. (2004). A stochastic comparison-grouping model of multi-alternative choice : Explaining decoy effects. *Proceedings of the 26th Annual Conference of the Cognitive Science Society*. pp.1351-1356.
- Tsuzuki, T., & Matsui, H. (2006). Context effects in multiattribute decision making : Examining attraction, similarity and compromise effects. *Abstract of the 27th Annual Conference of Society for Judgment and Decision Making*. pp.30.
- 都築誉史・松井博史 (2006a). 多属性意思決定における文脈効果に関するモデル研究の動向 立教大学心理学研究, **48**, 69-79.
- 都築誉史・松井博史 (2006b). 多属性意思決定における非合理的な文脈効果に関する実験的検討 日本認知心理学会第4回大会発表論文集, 34.
- 都築誉史・松井博史 (2006c). 多属性意思決定における文脈効果と属性の相対的重視度——魅力効果, 類似性効果, 妥協効果に関する検討—— 日本行動計量学会第34回大会発表論文抄録集, 150-151.
- 都築誉史・松井博史・木村泰之 (2006). 購買意思決定において参照される商品属性に関する探索的分析 応用社会学研究 (立教大学社会学部紀要), **48**, 37-52.
- 都築誉史・太田亨・白井俊行・松井博史・本間元康 (2007). 眼球運動測定による多属性意思決定における魅力効果の分析 日本認知心理学会第5回大会発表論文集, 34.
- 都築誉史・白井俊行・太田亨・本間元康・松井博史 (2007). 眼球運動測定による多属性意思

決定における妥協効果の分析 日本心理学会
第71回大会発表論文集, 885.

Tversky, A. (1972). Elimination by aspects :
A theory of choice. *Psychological Review*,
79, 281-299.

Tversky, A. (2004). *Preference, belief, and simi-
larity: Selected writings*. Cambridge, MA :
MIT Press.

Tversky, A., & Kahneman, D. (1992). Ad-
vances in prospect theory : Cumulative
representations of uncertainty. *Journal of
Risk and Uncertainty*, **5**, 297-323.

von Helversen, B., & Timothy, J. (2006). Indi-
vidual differences in satisficing and strate-
gies for sequential choice. *Abstract of the
27th Annual Conference of Society for Judgment
and Decision Making*. pp.18.

von Neumann, J., & Morgenstern, O. (1944).
Theory of games and economic behavior.
Princeton, NJ : Princeton University
Press.